

都道府県別賞一等

祖父が遺してくれたもの

滋賀県 大津市立瀬田北中学校 二学年

上山 瑛仁

春を告げる嵐が祖父を連れて行ったのだろうか。空も泣いている。祖父は年末から体調を崩していたものの、頑なに受診を拒んでいた。「まるで子どもに返ったようね」と祖母は手を焼いていたが「正月に来る孫に直接お年玉を手渡ししたいんだ」と祖父。今なら理由が理解できる。入院すれば感染症対策で面会もかなわない、もうこの家に戻って来られない、と悟っていたのだろう。正月には言葉も交わしていたのに、わずか二カ月後の対面が棺の中だなんて。身近な人の死を初めて経験した僕は涙が止まらず、しばらく何も手につかなかった。

そんな祖父は戦後に上京してから四十年間ひたすらに働き続けた。お守りのつもりで契約していた生命保険に初めてお世話になったのが六十に差し掛かった頃だったという。命こそ助かったものの、身体が不自由になり、以前のように仕事をすることもままならなくなった。更に十年後には追い打ちをかけるように数時間に及ぶ大手術も経験している。僕は生まれてから祖父に一度も抱っこしてもらった記憶がないのだが、そんな理由が隠されていたのだ。

この経験から祖父母は生命保険の大切さを僕の両親に説いてきたという。国の高額療養費制度は助かるけれど、支給に数カ月かかるとのこと。最近では医療技術の進歩や医療事情の変化で入院日数が減ってきていること。これに合わせて医療保険は短期入院でも給付ができるようになっていいるから、過去に加入した保険はすぐに見直しなさい、と。

そういえば母方の祖母も雪道で転んで骨折し、手術を経験したものの、入院一日目から給付金が支給されたと声を弾ませていたことが記憶に新しい。幸い僕の家族はまだ生命保険のお世話になったことがない。養老保険が満期になったとか、こども保険のお祝い金が振り込まれていたとか、掛け捨ての共済でも今年は割戻金が結構あったと喜ぶ母を見て、これまでとはさほど関心がなかったが、祖父の死を境に生命保険のコマーシャルでさえじつくり目を通して僕がいる。健康状態にかかわらず加入できる終身保険が葬儀代の足しになったことは言うまでもない。

今はまだ中学生だが、信じられないことに数年後には成人を迎える。日常の当たり前に感謝し、できる限り生命保険のお世話にならぬよう、祖父が紡いでくれた命を精一杯大事に生きようと今日も心に誓った。